

令和4年度
入学試験問題

国語

2月1日 第1限

仁愛女子高等学校

一 次の文章を読んであとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、字数に制限のある設問の場合、句読点・記号は一字として数えること。)

自己自身に目を向けること、そしてよく生きるとはどういうことかと考えることは、とても重要な課題です。しかしそれだけでなく、わたしたちはさらに一歩進んで、そもそも「自己とは何か」、つまり、ふだん自己とか自分とか言っているものはいったい何なのか、といったことについて考えたりもします。

そのように言うと、自分のことは、自分にとっては明々白々の存在であり、なぜそれをわざわざ問題にする必要があるのか、と思われる方もいるかもしれませんね。しかし、「自己」とはこのわたしの体のことですか、それとも、たとえば見るとか考えるといったような、わたしのさまざまな(A)の働きのことですか、その働きのものになっている心のことですか、などと問い進めていくと、なかなか一筋縄ではいかない問題であることがわかってきます。

哲学は、この「自己とは何か」というような、ふだんはあたりまえのこととして済ましている問題をあえて問い、事柄の真相にセマ^aつていこうとする営みであると言いうことができます。わたしたちの表面的な理解のハイゴ^bにある隠された世界^cにあえて入っていこうとする冒険的な営みであると言ってもよいでしょう。この冒険的な営みというところに哲学の醍醐味^dがあると言っても過言ではありません。

「自己とは何か」ということを問題にする前に、少し横道にそれますが、自分とか自己ということについて考えるときに、わたしがいつも感じていることについてお話ししたいと思います。それは自分がいま生きている、あるいはいまここにいる(わたしがいる)ことの不思議さについてです。

それについてお話しする手がかりになると思いますので、正岡子規の弟子の一人である高浜虚子の俳句を一つシヨウウカイ^eします。

老いてこゝに斯く在る不思議唯涼し

(訳) 年老いて、ここにこのように生きているのはなんとも不思議なことだ。ただ涼しい。

という句です。「老いて」と言われても、自分には遠い先のことだと思う人もいるかもしれませんがね。しかし、わたしのように年齢の

いったものはこの句に深い共感を覚えます。

「斯く在る不思議」というのは、もちろん（B）だけが抱く感懐^{*4}ではないでしょう。（C）にとっても、自分がいまここにいること、それはとても不思議なことだと思えます。父と母が出会わなかったら、わたしは生まれていなかったわけですし、戦争の時代に生まれていれば、その戦乱のなかで幼くして亡くなっていたかもしれない。

わたしたちはいまここに生きている、その視点からすべてを見ていますが、存在しなかったかもしれない、あるいは亡くなってしまったかもしれない、その存在しない方から見てみると、いま生きていることはとても不思議なことです。いまいる、いまある、ということは、まだない、もうない、というとても大きく「無」に包まれたちっぽけな点、小さな小さな「有」でしかないかもしれないのです。このように「斯く在る」ことはとても不思議なことなのです。

（B）にはまた、（C）とは違った思いが浮かびあがってきます。知らないうちに「斯く在る」、つまり、いつのまにかこのように^{*5}齢を重ね、いまここにいるという思いが強くなるのです。そしてその先にあるものに目がいきます。生の終わりを意識しながら、「斯く在る」ことをどう受けとめるのか、その先にあるものをどう受けとめるのか、そうしたことを考えます。さまざま思いがわきあがってきて、心は平静ではられません。たとえ知らないうちに「斯く在る」としても、「唯涼^④し」とはとても簡単には言えません。迷いもあり、執着もあります。不安もあり、恐れもあります。

しかし、そういうさまざま思いのなかで、虚子は「斯く在る」ことをただ静かに受けとめようとする自分に気づいたのだらうと思えます。それはとても不思議なことだと思えます。簡単にはそのような境地^{*6}に立つことはできません。しかし、そういうことがありうるのかわかりますし、そのことにとても惹かれる——そのような思いを抱く句です。

（藤田正勝『はじめての哲学』による）

※1 明々白々：非常にはつきりしていて、少しも疑わしい点がない様子。

※2 一筋縄ではいかない：普通のやり方では処理できない。

※3 醍醐味：深い味わい。

※4 感懐：心に抱く思い。感想。感慨。

※5 齢を重ねる：年をとる。

※6 境地：心の状態。

問一 二重傍線の部分 a 「セマ」・ b 「ハイゴ」・ c 「シヨウカイ」のカタカナを漢字で書け。

問二 (A) に入る最も適当なものの記号を書け。

ア 視覚 イ 身体 ウ 意識 エ 哲学

問三 傍線の部分①「表面的な理解」について、その理解の仕方を表している部分を文章の中から十五字以上二十字以内で抜き出して書け。

問四 傍線の部分②「隠された世界」を別の言い方で表した部分を文章の中から五字で抜き出して書け。

問五 (B)・(C) に入る最も適当なものの記号をそれぞれ書け。

ア 老人 イ 自己 ウ 若い人 エ 男性 オ 哲学者

問六 傍線の部分③「いま生きていることはとても不思議なことです」の理由として最も適当なものの記号を書け。

ア 若い人にとっては、いま生きているかもしれないかもしれない可能性は小さいと実感できる手段がないから。

イ 老人にとっては、生の終わりを意識しながら生きることを受け止めたとき、迷いや執着といった気持ちが現れるから。

ウ 存在しなかったかもしれない可能性の小ささに比べ、いま生きて存在している可能性はとても大きいことだから。

エ 存在しなかったかもしれない可能性の大きさに比べ、いま生きて存在している可能性はとても小さいことだから。

オ 正岡子規とその弟子の高浜虚子が考えた末にやっと到達した「哲学」であり、わたしたちには想像できないことだから。

問七 傍線の部分④「唯涼し」とあるが、どのような心境か。解答欄の「 心境。」に続くように、文章の中から二十字以上二十五字以内で抜き出して書け。

次の文章を読んであとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、字数に制限のある設問の場合、句読点・記号は一字として数えること。)

家族のなかで自分の存在意義を見いだせない中学校三年生の悠人は、夜の公園で富沢朱音という少女と出会い、その場所でお互いの話を何度も交わしていく。後日昼間にスパーマーケットで妹の和花と二人で歩いている朱音の姿を目撃し、悠人は声をかけるが朱音は悠人から逃げるように去っていった。

土日はさんだので、悠人が坂和公園にむかって走るのは、四日ぶりだった。この日は、どんよりと曇った日で、頬をなでる風が湿気をふくんで重く感じられた。雲が広がっているせいか、夜空がやけに白っぽく見えた。

公園に足をふみいれるとき、悠人は自分がキンチョウしているのを意識した。ブランコに近づいていったが姿がない。が、ゆっくりと頭をめぐらしてすべり台の上に目をとめる。朱音は縮こまって体育座りをして、空を見上げていた。

ことさらに足音を立てて近づいていくと、朱音は、立ちあがった。おもむろに手を上げたので、とびおりるのかと思ったが、かがんで足をのばすと、すべりおりてきた。

「とべないよね、鳥じゃないから」

朱音はかわいた声で笑った。前は、とびおりたのに。まるで、羽がもがれたとでもいうようではないか。だまっていると、また朱音が口を開いた。

「何もかも捨てて、逃げだしたくなることとか、ある？ なんのために、生きてるのかな、なんて考えたり」

重たいことをいっているのに、なぜだか朱音の口もとにはうっすらと笑みがうかんでいる。けれどそれは、ほんとうの笑顔にはほど遠い。まるで表情のない仮面が口角だけ上げたような顔だった。悠人は、朱音から視線をはずして、つぶやく。

「……あるよ」

それから、視線を朱音の目にもどす。そのとたん、最初に朱音に声をかけた日、ほうつてはおけないような気がしたことがよみがえる。たぶんあのとき、自分の思いに重なるものを直感的に感じたのだ。

「べつにさ、すごくこまってるわけじゃねえけど。父親は女つくって、出てっちゃってさ。家は貧乏だけど、だからって、食ってけねえって

ほどもねえし。兄貴の出来がよくて、いつも教師や親戚にくらべられたってさ、友達がいなわけじゃねえ。たぶん東高*1には受かるだろうし。東校なら、そこそこだろ」

そんな言葉をはきだしながら、自分は何をいつているのだろうと、思った。知りあつてまだ半月もたたない、名前以外、ほとんど何も知らない女子を相手に？ そう思いながらも、悠人は言葉を押しとどめることができなかつた。

「兄貴がさ、おまえはずるいつていうんだ。おれにいわせりゃ、ずるいのは、あつちだよな。みんないいところもつてちゃてさ。うちは、兄貴を中心にまわつてるんだ。母親とかも、兄貴にしか興味もつてねえし。おれが、突然消えても、だれもなんも感じないだろうから。正直、自分が、存在する意味、わかんねえんだよな」

はきだすような言葉。自分でも驚いた。こんなことを口にするなんて……。でも、ほんの少しだけ、^②気持ちが高揚する。しばしの沈黙のあとで、

「……わたしは……」

と、朱音がためらいがちに口を開いたが、すぐにきゅつと唇を結ぶ。

「いえば？ ほかに、だれもいねえし」

「……わたしは、いなくなつて、なれないんだ。わたしがいなくなつたら、うちが、こわれちゃうから」

「こわれ、ちゃう？」

「会いたくなかつたよ。昼間になんか」

「この前のこと？」

「そう。だれかに見られたくない。主婦みたいに、買い物してるのなんて。たいへんだね、なんていわれたくない。妹をかわいがつて、やさしいお姉さんだね、なんて。何もわかんなくせに。和花のことだつて、どなつちゃうんだよ。だつて、わたしがツインテール、結んでやるのに、気に入らないつてぐずるから、いらいらして。テレビとか、見てないし。アイドルとかも、わかんなくつちやつてる。おしゃれとか、できないし。やさしくなんかない。宿題だつてできない日がある」

「……………」

「帰らなくちゃ」

「富沢さ……………」

「へんなこと、いっちゃった。忘れていいよ」

朱音は、そういうと、背をむけて歩きはじめる。その背中を少しのあいだ見送っていたが、悠人はあわててあとを追った。

「……お母さん、ずっと、病気なんだね」

返事はなかった。でもたぶん、あたってようだ。

「お父さんは？」

「名古屋。単身赴任中」

それ以上、何もきけなかった。坂和*2ヒルズが見えてきたとき、ぼつりと冷たいものが頬にあたる。

「雨だ……」

ついそうつぶやいたのは、沈黙にたえられなかったからかもしれない。悠人は、そつと息をはく。やっぱり、きかなくては。

「手伝いなんて、してないっていったよね」

「……………」

「それって……」

「家事の手伝いじゃなくて、家事なんだよ」

朱音は、ヨクヨウdのない声でそういうと、建物の方に走っていった。

にわかには、雨脚あまあしが強くなった。でも、走りだすことができなかった。

ようやく、朱音の秘密が明かされたような気がした。

悠人は歩きながら、朱音が口にした言葉を思いうかべる。——テレビとか、見てないし。アイドルとかも、わかんなくなっちゃってる。

テレビ番組をネタにもりあがる女子トークにも、すんなり入れないのかもしれない。でも、そのことを口にはできずに、笑ってごまかしているのだろうか。それだけならまだしも、勉強もどこおりがちになるし、遅刻してしまうことも、つい居眠りしてしまうこともあったとすれば？ 学校では事情を知らない周囲から、生活が乱れている、と思われて。しかも、母の病気の心配をしながら。

朱音はずっと、そんな日々③をすごしてきたのだろうか。

いつだったか、寝不足だといっていたのは、家の手伝いがたいへんだったせいなのかもしれない。いや、手伝いではないのだ。そんなお手軽なものではない、ということなのだ。

空を見上げると、ちょうど雨粒が目に入った。悠人は、晩秋の冷たい雨にぬれながら、歩いて家に帰った。ぬれたままダイニングに入ると、

「あら、雨なの？」

と母がいった。テレビがついていたせいか、雨音に気づかなかったようだ。画面は、にぎやかなお笑い番組だった。

「今、お風呂、直人が入ってるから」

すぐには入れない、ということだろう。むすっとした表情で、

「テレビ、見てないなら、消せば？」

という。

「見てるわよ」

「ばかばかしい番組？」

「だからでしょ。気分テンカンがいるの」

それには応じないで、部屋にひっこむ。ぬれたジャージをぬぎすてて、ねまき代わりのスウェットに着替える。

今ごろ、朱音は何をしているのだろうか。

最初は、同類かと思った。だから気になった。坂和ヒルズの住人であることを知ったときは、^④がっかりした。でも、朱音が今かかえている状況は、悠人の想像をこえてきびしそうだ。

父親が単身赴任中だといっていた。家族はほかに妹。つまりは、朱音が母の看病をしているということなのだろう。母親の病気がどの程度のものなのか、いつからなのかはわからないが、悠人と出会ったときには、すでに病気だったはずだ。とすれば、もう一か月以上になる。いや、もつと前からかもしれない。

悠人は、自分がひどく甘えたことを口にしてしまったような気がしていた。でも、嘘をいつたわけではない。本気だったのだ。あの瞬間、わかりあえるんじゃないかと、そんなふう感じた。鳥じゃないから、^⑤という言葉をきいて、悠人も同じようなことを考えていたと思っただのだ。

(濱野京子『ウィズ・ユー』による)

※1 東高：東高校。いわゆる難関校ではない。悠人は今の自分の成績に合った進路を目指している。

※2 坂和ヒルズ：数年前にできた新築の高級マンション。オートロックのおしゃれな外観をしている。

※3 直人：悠人の兄。いわゆる難関校に通っている。

問一 二重傍線の部分 a 「頬」・b 「キンチョウ」・c 「親戚」・d 「ヨクヨウ」・e 「テンカン」のカタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書け。

問二 傍線の部分①「おもむろに」の意味として、最も適当なものの記号を書け。

- ア 悲しそうに、そっけなく
- イ しずかに、ゆっくりと
- ウ あわてたように、焦って
- エ さわやかに、はきはきと

問三 文章の中で直喩が使われている文を、二十字以上三十字以内で二つ抜き出し、それぞれ初めと終わりの五字を書け。

問四 傍線の部分②「気持ちが高揚する」から悠人の心情として最も適当なものの記号を書け。

- ア まわりの人間が誰も相手にしてくれず、初めて相手にしてもらってうれしい気持ち。
- イ 自分のためこんでいたものを話せる人間が目の前に現れて、それを話すことができ満足した気持ち。
- ウ 受験勉強も順調で、目の前の朱音にも同じ高校に来てほしいと思う気持ち。
- エ これまで異性との出会いが極端に少なく、興味をもって面白いことを話そうとする気持ち。

問五 傍線の部分③「そんな日々」の内容として、**適当でないもの**の記号を一つ書け。

ア 学校生活に支障が出ているような日々を送っている。

イ 学校には通学しているが、経済的に苦しい日々を送っている。

ウ 妹の世話をはじめ、家事全般をこなす生活を送っている。

エ 母の病気の看病をしながら学校生活を送っている。

問六 傍線の部分④「朱音が今かかえている状況」とはどのような状況か。文章の中の言葉を用いて六十字以内で説明せよ。

問七 傍線の部分⑤「悠人も同じようなことを考えていたと思ったのだ」について、「同じようなこと」とは何を指すか。文章の中から十五字以上二十字以内で抜き出して書け。

次の文章を読んであとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、字数に制限のある設問の場合、句読点・記号は一字として数えること。)

原文

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山※1の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにものあはれ①もなからん。世は定めなきこそいみじけれ。※2

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かけろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。(中略)命長ければ辱多し。長くとも、四十よそぢに足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥bづる心もなく、(中略)ひたすら世を貪むさばる心のみ深く、ものあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。③

通釈文

あだし野の露が消える時がなく、鳥部山の煙が絶えることがなく、煙のように人間が永遠に生活できるものだとしたら、もの

I はないことであろう。この世は無常であることが素晴らしいのである。

この世に生きるものを観察していると、人ほど長く生きることはない。白露虫は生まれた日の夕暮れを待つて死に、夏のせみは春も秋も知らないで死んでしまう。(中略)長く生きた分だけ恥をかく状況が多くなる。長生きしたとしても、四十歳手前で死ぬのが無難なところだろう。

その歳を過ぎてしまうと、無様な様子をさらしている自分を恥とも思わず、(中略)現実に執着して欲だけが増幅する。もの

I も分からなくなってしまうのは、II ことだ。

解説文

この段は、『(A)』全体の要旨を説明しているかもしれません。それは、「無常観」を見事に述べているからです。直接の表現ではなく、「鳥部山の煙が永遠に続くように、人がこの世に生き続けられれば……」と比喩を用いています。永遠の命を持つのが理想である、というのが時の権力者の考え方です。

ところが、出家して俗世から距離を置いて見ている（ B ）は、それを「情趣がない」といつています。「世は定めなきこそいみじけれ」というように、この世は無常であるのが素晴らしいと述べています。まさに悟りの境地といえるのでしようが、『（ A ）』は（ B ）が四十七〜四十八歳頃の作品です。

白露虫は朝に成虫になり、夕方になると短い生命が終わります。夏のせみがわずか一週間の命であることも知られています。それが生物の宿命であり、鎌倉時代から世の中に認識されていることのようにです。

（ B ）は、人間の生命の長さを思い、長生きすると恥をかくことが多いと述べています。また、人は四十歳を過ぎると世俗の欲望ばかり強くなって、ものの情趣を感じなくなるとも述べています。このあたりは現代と年齢に対する感覚も異なるでしょう。

ただし、「ものあはれも知らずなりゆくなん、あさましき」というように、感動する心や味わいが消え失せることは II 、という考え方は大事にしたいものです。いくつになっても感動できる心を持つていたいと願うことこそ、現代に通じるものがあるのでしょう。

（手束仁『人生の達人になる！』（ A ） 幸運と成功を引き寄せる65のヒント』による）

※1 あだし野：地名。墓場と火葬場があったとされる。

※2 鳥部山：鳥辺野とも呼ばれる。地域名、墓所。京の三大葬地「東の鳥部野」「西の化野」「北の蓮台野」として有名。

問一 次の文章は原文についての解説である。空欄（ A ）～（ C ）に入る最も適当なものの記号を書け。また、空欄（ D ）は解説文から適当な語を抜き出して書け。なお、空欄（ A ）～（ B ）は解説文と対応している。

原文は『（ A ）』からの引用である。『（ A ）』は、鎌倉時代末期、（ B ）によって書かれたもので、作品ジャンルは（ C ）である。人間全般にわたつての思想や批評・感想・伝聞などが述べられており、それらに共通する理念は、仏教的（ D ）観である。

ア 徒然草 イ おくのはそ道 ウ 兼好法師 エ 松尾芭蕉 オ 随筆 カ 紀行文

問二 波線の部分 a 「かげろふ」・ b 「恥づる」を現代仮名遣いに直して書け。

問三 傍線の部分①「あはれ」の意味として、本文の I に入る言葉を、解説文の中から漢字二字で抜き出して書け。

問四 傍線の部分②「こそいみじけれ」とあるが、これはある事象や行為などに対する、作者や登場人物の感動や疑問の気持ちを強調するときに用いられる表現である。この「こそ」を使用することによって文末が変化する表現を何とよいか答えよ。

問五 傍線の部分③「あさましき」の現代語訳として、対応する本文の II に入る最も適当なものの記号を書け。

ア うれしい

イ 嘆かわしい

ウ ありがたい

エ うらやましい

問六 二重傍線の部分「あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば」について、「露」や「煙」と同じ【はかないもの】を表現している部分を 原文 から二十五字以上三十字以内で抜き出して書け。

問七 解説文 の中で(1)現代に通じる部分と、(2)現代と異なる部分をそれぞれ五字以上十字以内で抜き出して書け。

問八 原文 の作者の心情として最も適当なものの記号を書け。

ア この世に生きる生き物を見ていると、人間は欲を抱え恥知らずに生きている。

イ 人間だけが長く生きていて、他の生き物が早く死んでしまうのはかわいそうなことだ。

ウ 生き物の中で人間が優れているのは、欲を持たずに生きているところだ。

エ 歳を経ていくことで、感動できる心がより強くなっていく。

